

— 本学図書館のスペシャル・コレクションより(1) —

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力

『ペリー日本遠征記』にみるシーボルト

奥 正敬

今から152年前の1853年（嘉永6年）6月3日、アメリカ合衆国のマシュー・ペリー提督が軍艦4隻で開国を求め浦賀沖へ来航した。ペリーはこの日本遠征を前に、我が国についての幅広い事前研究を周到に行って目的を成功に導いたのである。

この研究には当時の鎖国体制の中、ヨーロッパで唯一交渉が保たれていたオランダから来日していた人たちの著作が使われていた。ペリーとその幕僚達は遠征の終了後、アメリカ議会へ宛てた報告書『ペリー日本遠征記』(Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan. 3 vols. Washington [D.C.], 1856.)の中で、オランダ商館の医師として長崎の出島に来ていたドイツ人、フランツ・フォン・シーボルトについて、「彼は目新しい事実や資料を集め、その観察と調査の結果を『日本—日本記録集成—』という著書にまとめ、世に出した」とし、さらに彼をエンゲルベルト・ケンペルやカール・ペーテル・トゥンベリーの二人の出島滞在者による傑出した研究業績と共に、「オランダとの通商が始まって以来の、最も優れた情報提供者」であるとも述べ、その業績に高い評価を与えている。

しかし、シーボルトはペリーの日本遠征とその目的を事前に察知し、遠征準備中のペリーに対して様々な働きかけをしていた。このシーボルトの動きはペリーとその幕僚達を悩ませ、『ペリー日本遠征記』には彼らの怒りにもなって現れている。中でも、シーボルト自身がペリーの遠征隊の一員に加わりたいと申し出ている点については、シーボルトが日本国内から持ち出しを禁じられていた地図をオランダへ持ち帰ろうとして発覚した所謂「シーボルト事件」で、事

件に関与した幾人かの日本人を死に至らしめており、「日本から追放されたといわれている人物を同行させることでなんらかの悪影響が生じ、自らの使命遂行が危ぶまれるような事態をさけるために、あらゆる権勢家や最高権力者の推薦を退けてでも、シーボルトを遠征隊の船に乗せることを頑として拒絶し続けたのだった」と記載している。

さらに、ペリーの日本遠征終了後にシーボルトが出版した小冊子で、「日本を開国させたことに関して、アメリカ人ではなくロシア人に感謝しなければならない」と述べている点について、ロシアがペリーの日本遠征に時期を合わすかのようにプチャーチン艦隊を日本へ送っていることから、アメリカの交渉が紛糾して武力行使に至った場合、ロシアがこれを仲介して漁夫の利を得ようとしたものとして、ペリーは「シーボルトが、ロシアのスパイではないか」と疑っている。またシーボルトがオランダ国王へ日本が開国するよう勧める親書を出すように上申した点など自らを誇る文章を捉えて、「教養ある医師にふさわしい謙虚さがない」とも述べ、ペリーとその幕僚達のシーボルト観は激怒の域に達している。

日本人にとってシーボルトは、出島滞在中に「鳴滝塾」を開いて蘭学者の育成に努め人々から信頼を集めていた姿と、「シーボルト事件」の当事者としての姿の両面を持った存在である。日本を開国に導いたペリーもシーボルトについては、日本研究者としての業績を高く評価しながらも一方では彼の振る舞いを厳しく咎めていたのである。

本学図書館のスペシャル・コレクション「NIPPONALIA（西洋言語で書かれた日本研究書）」は、このように日本を取り巻く外国の歴史の一こまを教えてくれるのである。（文中の引用は、『ペリー艦隊日本遠征記』栄光教育文化研究所、1997.より行った。）

おく まさよし

（司書・図書館事務長兼管理運営課長）